

ピッポ新聞

2006

2

No.206

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail itoh@pippo.co.jp

神田の「古書」市

古書組合に入会して神田にある古書会館で開催されている古書市に出入りするようになったことはすでにお伝えしましたが、これまでに三回市に行きました。そこで、今回は新米古本屋の「市」体験を記してみます。

神田は云わずと知れた日本一の古本屋街です。古本屋街へは駿河台下の交差点を右折し、九段下に向かって歩いてゆけば、通りの左側(すぐ目に付くのは三宣堂)にずらりと並んでいます。古書会館はそれよりちょっと別な場所、正確には神田小川町というところに在ります。ぼくは学生時代からこの駿河台界隈に親しんできました。親しんできたと言うより、青春時代の一期を過ごした地域です。

古書会館へいくのには、お茶の水の駅から駿河台下の交差点に向かって左側の歩道を歩いていきます。右側には明治大学の高層ビル(明治リパティールとか呼ぶんだったかな?)が表れます。ここには以前、明治大学記念館というドームを持った古い建物があり、大学を象徴していたのでした。

今もこの界隈は学生は多いですが、かつては神田と言えば、古本屋街と同時に多くの人たちには学生街としてイメージされていたのです。今の学生たちは、かつてこの明治大学の通りが「神田カルチエラタン」と呼ばれ、学生が反権力の戦いのため機動隊と衝突したことなどご存知だろうか? 「カルチエラタン」とはフランス

の学生街の地名で、当時やはり、フランスの学生たちがその街で反権力の戦いを繰り広げたことで世界中に名を馳せたのですが、それになぞらえて「神田カルチエラタン」あるいは「日本のカルチエラタン」と呼ばれたのでした。あれっ? 話が横道に逸れそうなので引き戻して。

その明治大学を過ぎ、駿河台下の交差点の一つ手前を左折するとすぐ左に古書会館は在ります。古書市は毎週月曜日から金曜日まで毎日開かれるのですが、日によってジャンルや特徴がちがうようです。ぼくは月曜日に開かれる市に参加します。この日は一般書が多く出品されると事前に聞いていたからです。子どもの本はここに出品されることが多いと言ったことでした。

一番最初の市の時には親しい古本屋さんに案内していただきました。古書市は誰でもが参加できるわけではなく、古書組合に加入している組合員のみが出入りできるのです。出入りするには東京の組合の発行した「何処の組合に所属している」という本屋の何という者「か」という名札を首から吊り下げなければなりません。ぼくの名札には「静岡・ピッポ古書クラブ・伊藤俊男」と記されています。参加者全員がこれを首から下げるようになっていたのです。

ぼくが気に入ったのは、これを入り口でチェックする人などいないことです。普通だと日本人って、権威主義的に必ずそういう人がいるじゃないですか、そんな人がここにはいないのです。しかし、見る限りでは全員が名札を首からぶら下げています。感心しました! これですよ。

お互いがお互いを尊重しているからこそ、これが大人の対応だなど思いました。これに引き比べ、昨今のこの国の大人たちの、こういうことに対しての幼児性ときたら排他的で、ひどいものだとおもいませんか。学校や幼稚園などの出入りや校内の移動時に首から札をぶら下げさせられるのです。ひどい場合には玄関に鍵をかけている保育園もあるのです。出入り業者の中には、自らが自分で作った名札を首に下げられるまで表れるしまつです。

ぼくはこんなのを「バカヤロウ! 犯罪者や動物園の動物じゃあるまいし、名札をぶら下げる事を要求するところなんかこつちから願ひ下げだ!」と心では思うのですが、「ハイ!」と言って従っています。そんなことをしたからと子どもが安全が守られるとでも本気で考えているのかしらね。過剰反応だと思えます。この国の人びとは、その人間がどこに所属しているかが明らかでない相手を利用することもできないのかしら。それと、自らも自分がどこかに所属していないと不安になるのでしょうか? ぼくにはとうてい理解できません。

また横道に逸れてしまった

本は三階と四階に並べられています。出品が多い場合には二階も使用するようで、最初の時はその二階まで陳列されていました。

会場に入って、まず、山のように積み重ねられている本の多さに圧倒されました。本屋の

本のように棚に並べられているのではなく、何冊かまとめてビニールのひもで括られて僕の身長より高く積み上げられています。文庫本やコミックなどは五十冊ぐらいが一つに括られ、単行本などは十五、二十冊ぐらいで括られています。それが一本だけという場合もありますが、大体は何冊か一緒になっています。その量は出品者によるので、多い場合にはこれが十本以上になります。

落札する本の塊ごとに封筒がつけられていて、落札希望者はその封筒の中に自分の希望購入値段を書いて入れるのです。

これには決めごとがあり、最低二千円以上の値段を付けなければならないこと。値段は、高い値段と安い値段の二通りを書くことができます。落札価額を一万円以上に設定した場合には三種類の値段を書くことができるのです。それに誰が入札したか分かるように店名なども書き込みます。ぼくは「静岡・ピッポ」と書いています。

まだ、ぼくは専門用語が良く分からないのですが、この方法を「置入札」あるいは「置き札」(?)と呼ぶようです。その他にこれは静岡の「市」で経験したのですが、「まわし」(?)と言う方法もあります。

この場合参加者が車座に座り、出品された本を一冊ずつ参加者に回していきます。落札したい参加者はやはり封筒の中に落札希望価額を書いて、最後に組合の役員が開封して一番値段を高く付けた人が落札者というわけです。他に、魚市場のように声を発してやる「せり」もあるようですが、こ

の古書会館ではおこなわれていません。

さて、ぼくは最初の時、案内してくれたMさんに「詳しく見たい場合にはひもをほどいて本の中を調べても良いが、必ずしはりなおしてくように」とか、「一度金額を書いて入れた札を訂正したい場合は、改めと書いて、新しい価額を書いて入れることができ、さらに訂正したい場合は再改めと表示するように」など教わりながら、まず子どもの本を探しました。

コミックなどはやたら目に付きますが、やはり他の本とちがいで子ども本は余り出品されていないようです。でも「岩波のこどもの本シリーズ」が四十冊ほど括られているのを発見しました。

見ると、品切れになつていて本も何点か含まれています。これは買いたなと思つて、さっそく紙(これは会場の入り口に置いてある束になったメモ紙・自由に使って良い)に値段を書き込んで封筒に入れることにしました。

ぼくにとつては初めて値段をつけるわけですから、いくらに付けたら落札できるのかなど見当もつきませんでした。見るとまだ誰も入札していないようでした。

このとき「この本をこれくらいの値段で仕入れて、これくらいの値段で売れば、いくら位もうかるぞ!」などという妄想が頭の中を駆けめぐったのです。ですから、ぼくは最初の本の値段は儲けを頭に描いて値段を決めたのでした。

会場を何回か見て回るうちに目も慣れてきて、子どもの本が目入ってきました。な

かには欲しい絵本もあり、四点ほど入れ札をしました。

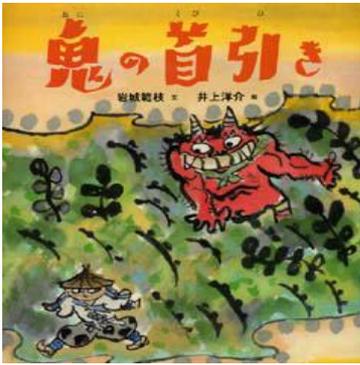
他にも百冊以上の創作の単行本を中心にした束もありましたがこれはほしい本ではなかったのので応札しませんでした。

結果は失敗です！この最初の市では、一つも落札することはできませんでした。多くの付けた値段が安すぎたのです。やはり、儲けが先に頭を駆けめぐるのがいけなかったのでしょうか。このとき、ものには相場というものがあることを思い知りました。(続く)

なー、この本読んだ！

『鬼の首引き』(岩城範枝・文 井上洋介・絵 1260円 福音館書店)

さみしい野原に迷い込んだ若者が鬼に捕まってしまった。鬼は自分に喰われるか、娘の鬼にくわれるるかどちらか選べという。



そこで、若者は娘をえらぶ、娘が若者を喰おうとすると、若者が腕相撲を持ちかける。娘の鬼は負けてしまうそこで娘は親鬼に助けを求め、若者の機転で心の痛いところを突かれ親鬼はなかなか手を出せない。次は足相撲、そして首引き

と続くが娘は負け続ける。その度に娘は助けを求め、そのときの親鬼の狼狽振りがユーモラスである。この絵本狂言の「首引き」を下敷きにして書いたという。

『ホームランを打ったことのない君に』(長谷川集平・作1260円 理論社) 長谷川集平の最新絵本が、本当に久しぶりに出た。1976年の「はせがわくんきらいや」でデビューして今年で三十年になるそう。いまや子どもの人気スポーツはサッカーであるが、この絵



本の主人公の「塁」は野球少年だ。野球を志している者は一度は打つてみたのがホームランである。塁は2点ビハインドで、6回表ワンアウトでランナー・三塁の場面でバッターボックスに立つが……。

『絵くんとことばくん』(天野祐吉・作 大槻あかね・絵 1365円 福音館書店)



たくさんのふしぎ傑作集 人に自分の要求や思いを上手に伝えるということは簡単なようではない

て、とても難しい。ここではそれを、小学四年のぼくがお母さんにお小遣いを上げて貰うためにはいかに伝えればよいかを「ことばくん」と「絵くん」を登場させて様々な試みを展開していく。広告批評の第一人者である天野祐吉はこの本を通して、物事をどうつたえるかという難しさ、楽しさ、おもしろさを味わせてくれる。

『こんにちはおてがみです』(1680円 福音館書店)

これまで出版された「こどものとも」の中から十人の絵本作家の描いた主人公から読者の子どもたちへ十の手紙が届きます。まずは「ぐりとぐら」から、次は「あさえとちいさないもうと」のあさえからというぐあいに……。



そしてこの手紙はみんな「こどものとも広場」への招待状になっています。その「広場」は巻末に折り畳みで大きな絵として描かれています。ここではさらにもくさんのこども

のとも主人公と出会え遊ぶことができますよ。きっと君の大好きな主人公にも会えることでしょう。そうそう、この手紙を君に届けてくれるのは「ゆうびんやさんのほねほねさん」です。(限定出版)

山里からの便り

佐久間雅哉

冬の山にはご用心！

一月十六日、やっとのことで十七年度の境界巡視のしごとを終えることが出来ました。工期は十六日まで。三が日は休んだけれどその後は二日休んだだけの突貫巡視です。天気が良かったからギリギリ間に合ったけれど、これが去年のように雪が多かったら間に合わなかったでしょう。

僕が担当する管内の山は夏よりも冬の方が景色を見通せて登山したら良いと思えますが、巡視となると色々厄介なのです。まず厚着になりますし、荷物も増えるし体の動きが鈍くなります。昼食や休憩はそこそこですませないと、冷え込むばかりか、作業時間が短くなってしまいます。日の入りが早いから、夏よりも一時間くらい早く切り上げなければなりません。積雪があれば、巡視距離は短くなります。

境界標が雪に埋もれ、目視できないので、いちいち検縄（測量用巻き尺）とコンパスで捜すから手間取ってしまうのです。それに雪や氷で危険度はたかくなるから仕事のはかはいかない、体も気持ちも疲れるので難儀します。でも、最大の厄介は、猟期に

ぶつかることです。十一月十五日から二月十五日までが猟期となっていて、多くのハンターが山に入ります。

この時期は山で怖いのは熊、滑落ではなくハンターの誤射と言うことになります。誤射されるといことは実際にあることで、ハンターは例外なくオレンジ色のジャケットを着ています。遠くで銃声が聞こえるだけでもイヤな気持ちをするのに、間近でズドンやられた日には、笛を吹いたり、大声をだしてこちらの存在を知らせます。僕たちも赤い服を着るようにしているし、熊除けの鈴もこの時期ばかりはハンター除けにはやがわり。なにしろ僕たちは藪の中で仕事していますからね。

ハンターに出会ったときには、同じ山に巡視員が入っていることを無線で仲間に知らせてもらおうようにしています。それからサスケ（飼い犬）のことも伝えてもらうようにしています。僕が熊除けのために連れている甲斐犬は真っ黒なうえに胸に白い斑があるのでツキノワグマそっくりなんです。僕ですら不意に現れたサスケにドキッとさせられるぐらいですから、ハンターが誤射しても不思議はないのです。だから、サスケにも鈴を付けているし、胴輪にはピンクの樹木テープを四本も五本結わえ付け目立つようにしています。

しかし、厄介だと思っているのは相手も同じだと思えます。登山するような山では

ないし、林業地区でもない山中に何で人がいるなどと思うようです。仕事の説明、犬を連れてくる理由を言えば納得して貰えませんが、薬価なのにぶつかつたなんて内心はおもっているはず。特にサスケを嫌がりません。猟犬とのトラブルを心配するのですが、それはこちらと同じこと。今のところはトラブルはありません。

ハンターとの遭遇は確かに厄介なことだけど、良いこともあるのです。山や道や地名のこと、犬や鹿、熊のことなど興味深い情報を得られるので、これは巡視やネーチャースクールに役立ちます。

山にはいろんな危険が潜んでいます、腰に付けている熊除けの鈴がハンター除けになるなんて思いも寄らなかったことです。冬の山にはご用心、ご用心。

編集後記

「こどものとも」五十周年を記念してセレクションという十五冊のハードカバー版の絵本が福音館から出た。過去に傑作集になったが長いこと品切れだった絵本もあるが、中には特製版と書かれたものがある。これは今回初めてハードカバーにされたように思われがちだが、そうではなく、過去に「こどものとも社」の**専売品**としてハードカバー化されてすでに売られたものだ。一般読者には売らなかつただけである。このことは、今問題になって防衛施設庁の官製談合や、ホリエモンの金儲けと極めて近似している。こういう読者差別を何時までも続けているといつか読者に見放されますよ、福音館さん！老婆心ながら。